

戦時下の土浦中学生13

～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い3～ (霞ヶ浦その25)

第一海軍航空廠(一空廠)は、横須賀鎮守府に所属し、その内部編成は、総務部・補給部・飛行機部・発動機部・兵器部・会計部・医務部及び工具養成所をもって構成されていました。学徒たちは、養成班・教育班での基礎訓練が修了すると、補給部・飛行機部・発動機部・兵器部の各現場へ配属となりましたが、土中生の多くは飛行機部に配属されました。今回は飛行機部での学徒たちの作業の様子を綴っていきます。文中の【 】内は筆者による注記です。

飛行機部大型組立工場

飛行機部の主要業務は、「飛行機機体、プロペラ、落下傘及其ノ属具ノ造修工事、飛行機ノ装備及兵装工事並ニ此等ニ必要ナル工用材料物件ノ整備及検査ニ関スルコト」(海軍航空廠處務規程)と規定されていますが、戦争の激化に伴って、損壊機の修理や性能向上のための改造作業が多くなってきました。更に、戦況が逼迫した1944年以降になると、新型飛行機の製造やその前線への補給も行われるようになりました。

中48回・高1回の屋口正一は、その著『櫻水物語 戦中派の中學時代』の中で、飛行機部の大型組立工場について、次のように記しています。

「飛行機部大型組立工場は、当時の感覚からすると正に『巨大』であった。東西約一〇米南北約一八〇米、四〇年後の今日ですら六〇〇坪の建物はザラにはない。建屋内には『天山』『零戦』『雷電』等がウヨウヨ入って居り、翼巾約二五米の『一式陸攻』や『銀河』迄が小さく見えたのであった。

大きさと共にその内部の緊張感も驚きの一つであった。ほぼ中央のトーチカを思はせる、分厚いコンクリート製カプセル型監視塔は銃眼付で不気味であった。そこには執銃帯剣の衛兵が立哨してゐた。

高い屋根裏から長いコードで金属笠に百燭球が下つても場内は猶暗く、コンクリート床は所々ヒビ割れや凹みがあつて、油が黒く染み込んでゐた。

場内の各機は被弾生々しいもの、胴着

したものの改装中のもの等が修理整備を急いでをり、その搭乗員か関係者らしい飛行服姿の兵が付添つたり行き交ひ、工員も学徒も黙々としかも馳歩的速度で作業に携つてゐたのである。」

飛行機部での作業

土中生たちは、飛行機部で、主に事故機の修理を担当しましたが、前出の屋口正一は同書の中で、修理作業の様子を次のように書き留めています。

「事故機には『胴着』が多かった。胴着とは引込脚が出ないま、降着するものであるから、宙返り状に転倒するか停止する迄胴体そのもので地上を滑走する。従つて先づプロペラがタコの足の様に曲る。胴体下側はメクレ、ハガレ、凹み、そして草を食ひ込んで変形してゐた。修理作業は機体を先づ支持台に乗せプロペラを外す。これをペラ屋(プロペラ工場)へ運ぶ。次は胴体屋の仕事である。電気ドリルでリベットを抜いて外板を一枚づつ順次はがす。枠のゆがみ、折損、機銃で射抜かれたところを調べる。計器屋も操縦席にもぐり込み、一機に三、四人がはりついて手作業で何日もかかる。

やがて元通り組立てが終り塗装も仕上つて、南側の通用門から引込線を越して手押しで飛行場へ送り出した。程なくエンジンを始動し爆音高く：特に雷電のキーンといふ独特の金属音：試飛行した音を聞いた時の嬉しき喜びは格別であった。【工員達は銅工をブリキ屋、溶接工をガス屋と呼んでいます。】

土中45回生の作業

中学45回生は、実習終了後、簡単な

適性検査で、旋盤などの機械工作組と仕上・銅工などの手作業組とに分けられ、1944年8月から、飛行機部の各部署に配属となりました。以後、終戦の8月15日までの1年間、学徒たちの戦いが続けられました。その作業の様子を『戦いのなかの青春』より抜粋してみます。

(1) 部品作り

○中45回 坂井祥司(飛行機部第二工場 仕上)

「仕上での最初の作業は、爆弾懸架器の部品とかで、ケガキ線が画かれた薄い鉄板をヤスリで削つたり万力を使って曲げたりして何種類かの部品を作り、その部品を溶接場へ持つて行つた。溶接場では潮来高女【現潮来高校】出の若い女子挺身隊の人達が黒い保護眼鏡を掛けて、並んでガス溶接作業をしていた。そこで部品と部品とを溶接付してもらい、終わつたら砂噴場へ行って噴砂で溶接汚れを落としてもらった。つぎに塗装場へ行って黒く塗ってもらつて帰つて来るといった持ち回りでの部品作りをやつた。仕上から少し離れた場所では土浦高女【現土浦二高】の動員学徒が大勢まとまって作業していた。」

○中45回 廣瀬琢朗

「私の航空廠での作業は飛行機の部品作りである。型を使って可成りの厚い鉄板(五〜六ミリ位)に外形を野書きし、タガネとハンマを使用して先ず外形に近い形に切り取り、その後ヤスリを使って仕上げるという割りと単純な作業である。タガネには指を叩かないように保護用のゴム板をつけるが、最初はハンマが



第一海軍航空廠飛行機部第二工場前で往事を偲ぶ動員学徒たち(土浦中学45回生と土浦高女39回生)(平成7年4月10日)

「私達は、昭和19年7月より昭和20年8月まで、この航空廠の中で、主として零戦の修理を行って来た。私達の青春は、ここを初舞台として開始された、と言っても過言ではない。」(『戦いのなかの青春』より)

タガネに当たらず（ハンマを大きく振らないと鉄板が切れない）ゴム板を叩くことが多く、そのすごい衝撃で忽ち手が腫れあがってしまう。自信を失うと益々的を外すようになり、馴れるまでに一ヶ月以上を要し、機体の鉸打ち作業班がつくづく羨ましく感じた事を覚えていいる。

この時、私達学徒を親切に作業指導してくれたあどけない少年は、私達より二歳位年下で台湾出身と後から指導員に伺った。おそらく、当時【日本領であった】朝鮮や台湾などから相当数の人が強制連行されてきたものと思われる。いま考えれば気の毒な人たちである。

航空廠での私達学徒の直接監督者は、技術将校の方達で職業軍人でないだけに皆紳士であったが、或る時グループの一人が何かのミスを出し全体責任という事で、理由が判らないまま全員殴られ、軍隊という世界を垣間見た気がした。
(略)

『丸大』と称する人間爆弾や飛行場に並べる木製のオトリ機などを作って日本の国はどうなるのだろうかと思いがら、一方では『神風は必ず吹く』と信じひたむきに作業に精進した純真な少年の姿をいま誰が理解できようか。」



やすりかけの練習をする都立第三商業生
指導を受けて、直ちに万力に取り組み、やすりかけの猛練習（『アサヒグラフ』1944・昭和19年5月3日号より）

(2) 旋盤作業

○中45回 玉井正夫（飛行機部機械

工作組 旋盤班）

「第一海軍航空廠では、確か簡単な技能テストを受け旋盤部に配属された。当時貴重な工作機械である六尺旋盤を一人一台で担当し、マイクロメーターによる千分の何ミリ内の誤差での鉄棒の切削はかなりハードな仕事であった。製品材料が貴重なアルミや銅になると、不良品が出せないため、極度の緊張を求められた。その上数少ない旋盤のフル稼働のため、昼夜十二時間交替の作業を行った。飛び散る切削油や機械油で黒く汚れた作業服、切削時にでる鉄粉を含んだ紫煙の中で、全員何一つ不平もなくよく頑張ったものである。冬の深夜、カンテキ【しちりん・七輪・七厘（価が7厘ほどの炭で間に合うの意からという）。炭火を熾したり、煮炊きをしたりするための簡便な土製の焔炉】の上に置いて暖めた弁当を、車座になってお互い励まし合いながら食べたことが、今もって忘れられない思い出である。各自、口には出さなかったが、鬼畜米英撃滅のため、何事も勝つためにという一生懸命にして真摯な姿がそこにあった。」

○中45回 柴沼 弘（飛行機部機械

工作組 旋盤班）

「朝六時から夕方六時までの一週間の次は、夕方六時から朝六時までの夜勤。機械は二四時間フル運転だ。ある夜、作業服の裾を歯車に噛まれた。半ばちぎれた服をみて、大きな怪我になるところだったとゾツとした。立ち作業で疲れ、油断があったのかも知れない。」

(3) 零戦修復

○中45回 篠田 康（飛行機部第二

工場 銅工班）

「【動員されて5ヶ月が経った頃から、零戦の修理組立作業の各部分を動員学徒が分担して行い、完成させる作業方法が採られた。】零戦を我々だけで一機修理するように命ぜられ、162号機を手掛けることになり、私の分担はキャブレター（過給器のカバー）であった。完成して試験飛行の時には乗せてもらえるぞという声も聞こえて、皆んな一生懸命になつて取組み、相当熱の入った仕事をしたのだが、テストフライトは失敗に終わったと聞かされて、大変残念であった。然し、再び工場に戻って来た様子もないのでどうなったのであろうか。不思議に思えた。」

(4) 赤トンボ主翼調整・零戦ボルト収集

○中45回 熊木久義（九三中練立と

零戦ボルト屋）

「飛行中に操縦桿を手放すと、水平飛行を持続するという複製機九三中練【正式には、九三式中間練習機。通称「赤トンボ」】は世界一の練習機といわれていた。胴体や翼の外装はジュラルミン張りではなく麻布製の羽布張である。この羽布張が曲者で、所定の位置以外に足を乗せたり、うっかりスパナを落そうものなら直ぐに穴をあけてしまう（もつとも、直ぐに切貼りすれば修理出来るのだが）。

二枚の主翼のうち下翼は上翼より後方にセットされた。後方にずらすには、ターンバックルつきの張線でコントロールされる。この時一人の者が物指をあてOKをだすことになっていった。じつと

物指をもっているのも大変な仕事である。私達動員学徒は、化学実験用のスタンドに測定尺を保持させれば、一人分の省力ができると熟練工の班長さんに提案した。班長さんは早速、木工部に発注した。これは航空廠内の発明展で二位になった。この時の一位は手動式ストッパー付きのガソリン注入用漏斗であった。『ガソリンの一滴は血の一滴』といわれた当時ではむべなるかなである。

戦局が次第に激化し神風特別攻撃隊が出撃するようになり、九三中練の脚に爆弾をワイヤロープで固定して特攻機仕立てをするとの話が出てきた頃、私達は零戦の修理部門へ移った。

零戦は年々改良されその性能を高めていった。これが、また、私達ボルト屋泣かせであった。ボルト屋は、零戦の使用するいろいろな太さ・長さ・形のボルトを準備して置かなければならない。しかも、締付けたナットが緩まないように『割りピン』を入れる細い孔をボール盤であけねばならないのである。

同じ零戦でありながら型式の別はもとより、同型式のものでも三菱重工業製造のものの中島飛行機製造のものとは同じ部位のボルトに微妙な差異があるのには恐れ入る。このため、私達ボルト屋は暇をみてはスクラップ機の置場（解体部）へ行って、稀少のボルト収集をしていたのである。」

※参考文献

『戦いのなかの青春』戦後五十年 卒業五十周年 第一海軍航空廠動員学徒の集い（記念誌）『櫻水物語 戦中派の中學時代』

（中48回・高1回 屋口正一）
（高21回 松井泰寿）